

幼小の豊かなつながりが実現

シリーズ
子どもが
育つ場所を
訪ねて



那覇市立金城幼稚園

日本全国にある「子どもが育つ場所」を幼稚園教員が訪問。自分の目で見て聞いて感じたことをレポートします。

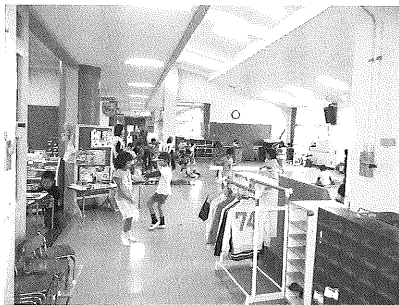
第10回は那覇市立金城幼稚園。沖縄の自然を生かしながら一人ひとりを大切に育み、小学校とのつながりを豊かにつくり出している園を訪ねました。



「白い砂の砂場は、水を流し込んでもスーッと浸透して溜まらず、砂を固めてお団子を作ることはできない」という話を、数年前に沖縄の先生から聞いた時から、いつかは行ってみたいと願っていた沖縄の幼稚園。沖縄のイメージである青い空、青い海のもとで育つ子どもたちの生活を見てみたい、という願いが、ようやくかなった。

前日に沖縄入りし、翌朝、国際通りに近い宿泊先からタクシーに乗り、金城幼稚園に向かった。急に降りだしたスコールの中、車は進む。駐屯地を右手に見ながら10分ほど行くと、教育研究所、高校、中学校が並び、自然豊かな公園の脇を通り、幼稚園に到着。幼稚園の隣には地続きの小学校も併設されていた。

到着するころには小雨になり、十一月下旬にもかかわらず24度という暖かさの



中、園庭にはブーゲンビリア、ペゴニア、インパチェンスなどのきれいな花々が咲いていた。

園舎の入り口で傘をたたんでいると、室内で思い思いの遊びに取り組んでいた子どもたちが集まってきた、「おはようございます」「スリッパどうぞ」とかわいい声を掛け、私たちを出迎えてくれた。

◆安心して思い思いに過ごす場所

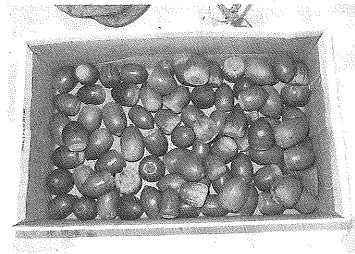
沖繩の公立幼稚園は、一年保育が主体、全園が小学校に併設されている。金城幼稚園は、昭和六十年に開園、四歳児一学級、五歳児三学級、計四学級、一二〇名の構成である。職員室に一番近い場所に四歳児の保育室があり、その隣に五歳児保育室が三つ並んでいる。廊下側には壁がなく、開放的な雰囲気だ。五歳児保育室前には遊戯室の広い空間が広がり、誰でも自由に



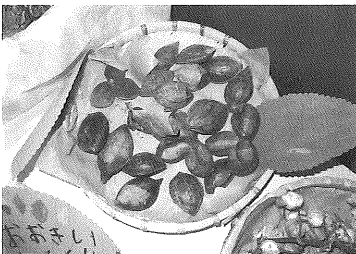
き来していた。自分たちで場を選べること、クラスを超えていろいろな友達の様子や遊びを見たり聞いたり伝えたりできることは、心も体も伸びやかに育まれる大事な経験と思われる。

保育室には、石垣島に住んでいる知り合いが送ってくれたという日本一大きいオキナワウラジオガシやモモタマナの種、月桃の実がすてきに飾られ、季節感が漂っていた。

気温24度、半袖Tシャツ姿で過ごしていても、季節はしっかりと秋。保護者向けのお知らせボードには、フリース生地製の首巻きの作り方が張ってあった。沖繩でも、こうして冬支度が進んでいることが伝わってきた。



▲オキナワウラジオガシ



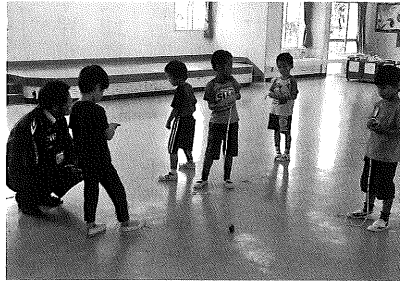
▲モモタマナ・月桃の実

◆ 幼小をつなぐ大切なひと・こと ↳ 園長先生と誕生会

園長先生は小学校校長との兼任だが、毎朝一時間半は園で子どもたちと過ごしているという。

園長先生を見つけると、待ちかねたようにコマを手にした五歳児の子どもたちが集まってきた。真剣な顔でひもを巻き、エイツとコマを投げる。見事にコマが回ると満面の笑みがこぼれる。これがただのコマ回しではない。コマをしっかり回せるようになる。園長先生に見ていただき、園長先生から太鼓判を押されると「my コマ」を頂けるといふ、特別のコマ回しだったのだ。

園児と園長先生の関係が、幼稚園と小学校のつながりの基になっている。それを痛感するエピソード



を主任の村吉先生から聞いた。それは誕生会の日のこと。幼稚園でのセレモニーを終えると、誕生月の年長児は村吉先生と共に園庭を抜けて十数段の階段を降りた所にある小学校へ行き、一年生の授業参観をしたり、給食室での調理の様子を見たりする。六歳になってうれしい気持ちのこの日に、小学生の姿や小学校内を見ることが、小学校生活に安心して近づいていってほしいという願いなのだろう。同時に、園児の姿を小学校の先生たちに知ってもらうことも意識されているとのことだった。

校内を回り、いよいよ最後に校長室を訪れ、そこで園長先生から「爪切り」をプレゼントされる。一歩間違えれば痛い思いもする爪切りではあるが、大きくなることは責任を持つことであり、自分で自分の体を意識し整えることができるようになる年齢になったのだということを感じているのだという。自分を大事にし、人のことも大事にしてほしいという願いが込められているのを感じた。「色の違う爪切りを子どもたちの前に並べると、どの色にするか決

まるまで、いろいろなドラマがあるんですよ」と園長先生は目を細めて話してくれた。

◆ 幼小をつなぐ大切なひと・こと ↳ 五年生との交流

雨が降っていたこの日、子どもたちは八時に登園してから室内で思い思いの遊びに取り組んでいた。十時十五分ごろ、片付けの音が掛かった。五年生が読み聞かせに来る時間になったのだ。

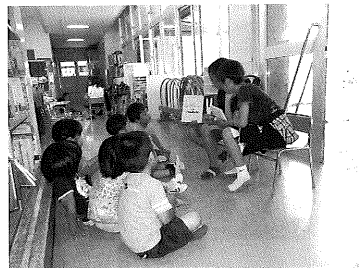
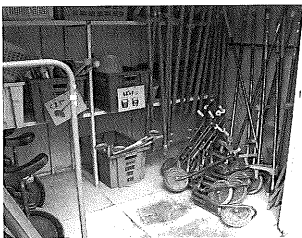
何人かの子どもたちが、戸口で小学校の方を見ている。ワクワク、うれしい気持ちが出来てきた。五年生が一人一冊ずつ絵本を持って、階段を上がり園舎に近づいてくる。「来たよ！」と担任や友達に伝えに行く子、照れたような表情で五年生を迎える子どもなどさまざまだ。五年生は四つに分かれ、各保育室に入っていく。あいさつを交わした後、五年生二人と園児五、六人がグループになり、いろいろな場所で読み聞かせが始まった。五年生は園児たちの座る位置や高さを意識しながら絵本を持ち、園児の様子

を確かめながら読み進めていた。園児のほうから五年生に声を掛ける姿も見られ、経験が積み重なっていることが感じられた。

五年生が小学校に戻る時に、遊戯室にグループごとに並んだ読み聞かせが終わり、くつろいだ様子でおしゃべりが始まった。五年生に対して、村吉先生が静かに感謝の言葉を伝えた。すると五年生たちは、スツと耳を澄まして聞きた。教師間の幼小のつながりが感じられた場面だった。

◆ 園庭環境に込められた大切な 思い

お弁当の時間、雨が上がった園庭を案内してもらった。園庭には大きな倉庫が二つあり、園庭で使う遊具がきれいに納められていた。





戸外遊びの時は倉庫の扉が開かれ、子どもたちが必要に応じて自由に出し入れしているようだ。

私たちを出迎えてくれたインパチエンスやベゴニアは、二期になって登園時に親子で植えたもの。子どもたちは一学期に

アサガオやヒマワリを育てた喜びを味わった経験があり、率先して世話をしているという。花にまつわる心に残るエピソードを二つ聞いた。

一つ目はヒマワリ。五月、親と離れることに不安のある子どももたくさんいる時期に「ヒマワリのおかあさん、おとうさんになりませんか？」と投げかけ、一人一粒の種をポットに植える。ぐんぐんと生長していくヒマワリに自分の姿を重ねて大切に育てたという。

二つ目はアサガオ。アサガオは上へ上へと伸びる。せっかくなが花が咲いても種がついても、高い所では子どもたちが自由に取って遊びに生かすことはできな



▲アサガオのトンネル（8月撮影）

いと考え、写真のようなものを考案したそうだ。こうすることで花や種を自由に取ることができ、アサガオのトンネルをくぐることもできたという。子どもたちの思いに添うような物をそこに置くと、

子どもたちも心地よく受け取り、しっかりと見る、変化を感じる、表現する、などの行為につながっていくのではないかと考えた。

園庭にはまだまだすてきな植物の空間があった。「カレーライス畑」「チョウのおうち」などである。野菜が植えられ、収穫したら調理して食べる。

オオゴマダラチョウが飛んできては卵を産み、それらが孵かえって飛び立っていく。自然に

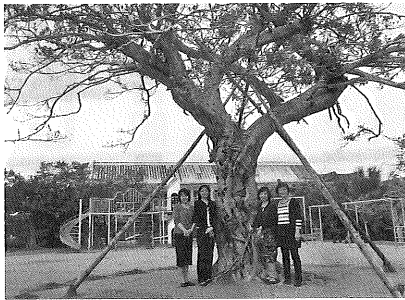


▲チョウのおうち

その行為が行われているように、教師は環境を準備し、幼稚園で暮らす仲間と共に気付いたり、試してみたり、時には挫折したり支え合ったり、ということを経験させているのである。

入園説明会用の冊子に、幼稚園では「遊びを通して子ども自身に気づかせる保育」を行い、多くの体験を通して生まれる子どもの発想や考えを大事に受け止め認めることによって「豊かな心」や「生きる力」を育てると書かれていた。まさにこの園庭で、子どもたちは成長を支えられているのを感じた。

念願の砂場遊びは、あいにくの雨によって見ることができなかった。靴箱には通園で履く靴と共に、砂場遊びで使用する島草履が置いてあった。夏には砂場を深く掘り、ブルーシートを敷き、水をはってブルーにするそうだ。私の園の砂場ではブルーシートを敷かなくても多少は水が溜まる。沖縄の砂



— 訪問メモ —

訪問時期：2012年11月
訪問場所：那覇市立金城幼稚園
〔住所〕 那覇市金城4-3-1
〔電話〕 098-858-6188
<http://www.nahaken-okn.ed.jp/kanag-kg/>

と東京の砂の違いを思い浮かべていた。
園長先生や村吉先生の話の聞いていると、園児のために、園児を育む家庭のためにという、凛とした教育観がそこに散りばめられているのを感じた。子どもを育てる場所であれば必然のことであるが、大事な理念と実践をこれからも共に発信し続けていきたいと願っている。

訪問者／伊集院・佐藤・高橋・宮里

文／高橋陽子（お茶の水女子大学附属幼稚園）